

[国 語]

説明的文章を用いた読解力を形成するための授業づくり

- 「指摘」と「変換」の繰り返しから「理由付け」につなげる読みの手立てをもとに-

高木 麻由*

1 問題の所在

昨年度担任をしていた小学2年生の生活科で、「動くおもちゃを作ろう」という単元を扱った。児童は、もの作りが好きな子達ばかりであったため、意欲をもって取り組み始めた。しかし、実際に教科書や図書室から借りてきたおもちゃ作りの本を見ながら作ってみると、児童からは「先生分かりません」「できません」「失敗しました」と多くの声が上がってきた。様子を見てみると、説明文をほとんど読まずに自己流で作っていたり、重要な手順の文を読み飛ばしてしまったり、文中の言葉の意味を理解せずに見様見真似で作ってしまったりしていたのである。私は、児童が文章の読解に対して困難さを感じていると考え、どのような指導によって読解力が児童に身に付くのかについて着目するようになった。

では、そもそも読解力とはどのようなものなのか。ここでは、OECDが進めているPISA調査の定義する読解力に着目する。PISA調査によれば、読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組む能力¹⁾とされている。また、その能力領域は、右の図1のように「①情報を探し出す」「②理解する」「③評価し、熟考する」という3つの要素で構成されている。田中(2018)はこれに対して、「PISA型読解力とは、社会の多様な資料やデータを比較して既有知識を活用しながら深く読み取り、読み取った結果を自分なりに解釈・評価してわかりやすく表現するという総合的な学力を意味している²⁾と、「文章を読み、その内容を理解すること³⁾とする辞書的な意味を超えて、読解力を捉え直したのである。

これに対して、松野(2008)はPISA型の問題を解くためには、右の図2のように、3つの観点から見た学習活動が必要だとして、実際の授業を想定してまとめている⁴⁾。「指摘(情報の取り出し)」は、教師の発問に対して、それに適合する情報をテキスト内から取り出す学習活動である。「変換(テキストの解釈)」は、テキストを異なる様式などに変えて表現し、さらに理解を深める学習活動である。「理由付け(熟考と評価)」とは、問題について自分で判断し、その理由を述べる学習活動となっている。この3つの観点は、図1の①～③の要素をより実践的かつ端的に言い換えたものと考えられる。私は、この3つの観点を積極的に取り入れた授業づくりが読解力の形成に有効ではないかと考え、本研究において、情報を取り出しやすい説明的文章を扱う単元を用いて、検証することとした。

2 研究の目的

1年生の児童が会おう説明的文章で、指摘(情報の取り出し)・変換(テキストの解釈)・理由付け(熟考と評価)に重点を置いた手立てが、読解力の形成に有効であることを明らかにする。

①情報を探し出す

- テキスト中の情報にアクセスし、取り出す
- 関連するテキストを探索し、選び出す

②理解する

- 字句の意味を理解する
- 統合し、推論を創出する

③評価し、熟考する

- 質と信ぴょう性を評価する
- 内容と形式について熟考する
- 矛盾を見つけて対処する

[図1 PISA型読解力の3つの要素]

- [1] 指摘(情報の取り出し)
- [2] 変換(テキストの解釈)
- [3] 理由付け(熟考と評価)

[図2 松野の3つの観点]

* 柏崎市立比角小学校

3 研究内容与方法

(1) 対象 新潟県内公立小学校 1年生 (男子11名, 女子12名, 計23名)

(2) 期間 令和5年6月下旬～7月上旬

(3) 単元名 動物クイズを作ろう (「くちばし」光村図書 1年上)

(4) 単元の目標

◎くちばしに関する「問い」と「答え」からなる文章構成の順序を理解し、内容を捉えることができる。(読むこと)

○「鳥のくちばしや動物のあしの特徴と使い方」と「えさ」という2つの視点を持ち、他の動物に関するクイズを作るための文章を書くことができる。(書くこと)

(5) 単元指導計画 (全9時間)

次	時	○学習活動	◆指導上の留意点・□評価(方法)
第一次	1	○くちばしについて、似ている使い方をしている道具から、多様なはたらきを知る。 ○動物クイズを作ること理解する。	◆鳥のくちばしや動物の足に関するクイズを作って、問題を出し合う活動だと知らせ、学習の意欲を喚起する。 □くちばしについて知っていることを話したり、クイズづくりに興味をもって、感想を出し合ったりしている。 (発言)
	2	○鳥のくちばしの特徴や使い方、えさについて、読み取っていくことを知り、学習の見通しをもつ。	◆音読の際には、指を文章上において移動させ、読み飛ばしがないようにする。 □問いの文と答えの文を見つけようとしている。 (発言)
第二次	3 4 5	○きつつき・オウム・ハチドリのかくちばしの写真から特徴を探す。 ○きつつき・オウム・ハチドリに関する、「問い→答え」という各文の役割を理解する。 ○きつつき・オウム・ハチドリのかくちばしについて、特徴や使い方、えさを読み取り、使い方が似ている道具を考える。	◆本文に線を引きながら色分けをし、問いと答えの文がどこにあるのか、視覚的に理解できるようにする。 (特徴と使い方→黒い波線、問いかけ→赤い傍線、答え→青い傍線、えさ→黒い傍線) ◆第1時で紹介した、くちばしと使い方が似ている道具の写真ワークシートに載せておき、選択できるようにする。 □3種類それぞれのくちばしの特徴や使い方、えさについて読み取っている。 (ワークシート)
	6	○教科書以外の鳥のかくちばしや、動物のあしについての説明文から、クイズに答える。	◆これから児童が作成するクイズの例となるよう、教科書と同じ形式で動物クイズを作る。 □問題文や写真から、動物の特徴に気付いて、答えを予想している。 (ワークシート、発言)
第三次	7 8	○他の鳥や動物についての動物クイズを解く。 ○図鑑を使用し、「鳥のかくちばし」か「動物の足」の動物クイズを作成する。	◆読書支援員と連携して、1人1冊図鑑を用意する。 □図鑑内の写真や文章を参考にし、くちばしや足の特徴や使い方、使い方が似ている道具について、クイズを作っている。 (ワークシート)
	9	○動物クイズを互いに出題し合い、友達と交流し、学習を振り返る。	□クイズを発表したり読み合ったりして、感想を伝え合おうとしている。 (発言)

(6) 研究方法

上記の目的のために、以下の手立てを取り、単元を通して「指摘(情報の取り出し)」と「変換(テキストの解釈)」を繰り返すこととする。その手立てがどのように児童の学習に影響したのか、松野(2008)が示した読解力を向上させるための3つの観点をもとに、児童の反応やワークシートの記述の分析をし、検証する。

① 「指摘(情報の取り出し)」の力を付けるための手立て

ア 教科書内の写真と付箋を活用する

1年生にとって、挿絵や写真は文章内容を理解する上で重要な手掛かりとなりうる。教科書内には、くちばし部分を拡大した写真と、鳥がかくちばしを使ってえさを食べる全体写真が掲載されている。本単元では、それぞれの写真を拡大したものと付箋をグループごとに配布する。付箋を使用して短い言葉でも写真から情報をたくさん取り出すことや、友達と同じ発見を分類したり比較したりすることで、より多くのくちばしの特徴に気付くことを期待する。

イ 教科書内容と同様形式のワークシートを活用する

本文は、「くちばしの特徴→問いかけ→答え→特徴と使い方→えさ」という5文で、3種類の鳥を説明している。繰り返しの形式で、異なる鳥について述べられているため、初めて読む説明的文章でも文章構成が捉えやすい。3種類それぞれの構成を押さえていくために、教科書と同じように「問い」と「答え」に分かれている、右の図3のワークシートを鳥の種類ごとに用意し、本文から情報をまとめる手がかりとなることを期待する。

ウ 同様の内容単元を活用する

本単元は、3種類の鳥のくちばしについての説明的文章となっている。さらに、説明的文章から情報を取り出す経験を増やすために、同じ様な内容の説明的文章を教材としている、「いきものあし」（学校図書1年上pp.52-59）の教科書教材を用意する。この教材では、あひる・ライオン・ダチョウの足について、「問いかけ→答え→特徴→その働き」の順序で説明が書かれている。くちばしに関する説明的文章と似ている文章構造を指摘したり、答えを予想したりすることで、指摘の力が身に付くことを期待する。

② 「変換（テキストの解釈）」の力を付けるための手立て

ア 教科書内容に関連する道具の写真を活用する

本文に書かれていることを、より身近なものに感じられるように、くちばしの使い方を日常の生活で使用する道具に例える学習活動を取り入れる。くちばしの使い方と似ている道具とその使い方は、ドリル（穴をあける）・ハンマー（砕く）・ストロー（吸う）・クリップ（挟む）・スプーン（すくう）・ざる（濾す）・槍（突き刺す）・カスターネット（音を出す）・櫛（整える）を用意し、それぞれの右の図4のように、道具をまとめてワークシート内で提示する。3種類のくちばしの使い方を理解した上で、その使い方と似ている働きをする道具を9種類の中から選択してその理由を述べることで、変換の力を身に付けると共に、本文の内容を深く理解することを期待する。

イ 図鑑を活用する

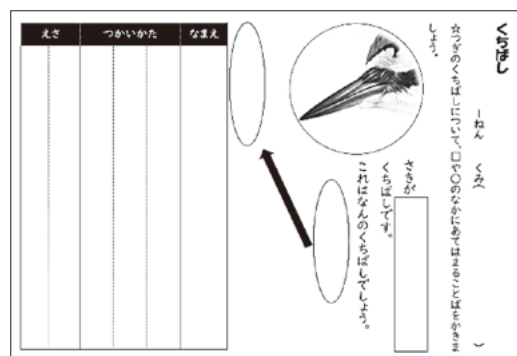
クイズを作成する場面において、図鑑を使用する。図鑑には、くちばしや動物の足についての詳しい記載がある。その膨大な情報の中から、クイズ作成に必要な情報を取り出す際に、「特徴や使い方」、「えさ」、「働き」の視点を用意しておくことが必要である。読み取った内容を異なる様式に置き換えて理解を深める学習として、読み取った文章内容や図鑑に掲載されている写真から、クイズの答えとなる絵を描く学習活動を取り入れる。読み取った内容を自分なりに文章化して説明するという変換の力以外にも、図や表、絵によって理解したことを表現するという変換の力が身に付くことを期待する。

4 研究結果の分析と考察

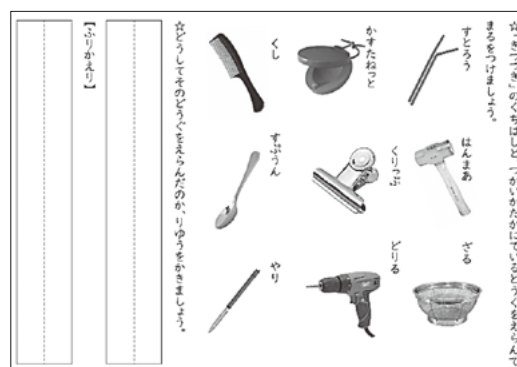
(1) 指摘（情報の取り出し）

① 教科書内の写真と付箋を活用した学習活動

この学習活動は、きつつき、オウム、ハチドリのかちばしについて、授業の導入で行った。児童は自分なりの言葉を用いて写真の中から情報を取り出ししていた。異なるグループであっても、全く同じ言葉や似ている言葉を付箋の中に書いており、全体で意見交流をすると、「同じ言葉の付箋がある」や「みんな、色や形に注目しているね」という気づきのつぶやきが多く見られた。また、回数を重ねていくことで、学習活動の手順が身に付いていたり、写真のどの部分から情報を取り出せばよいのか視点が定まったりしたためか、1つの写真から取り出す情報の量が増えていった。図5は、抽出グループの1回目から3回目までのワークシートである。1回目のきつつきの時点では形や色についての発見の数が多かったが、3回目のハチドリの時点では、くちばしの形が何か別のものに似ていることや、くちばしの色が単色ではなく様々な色でできていることに気付くことができていた。この変化は、写真の中から見えたものだけの情報を

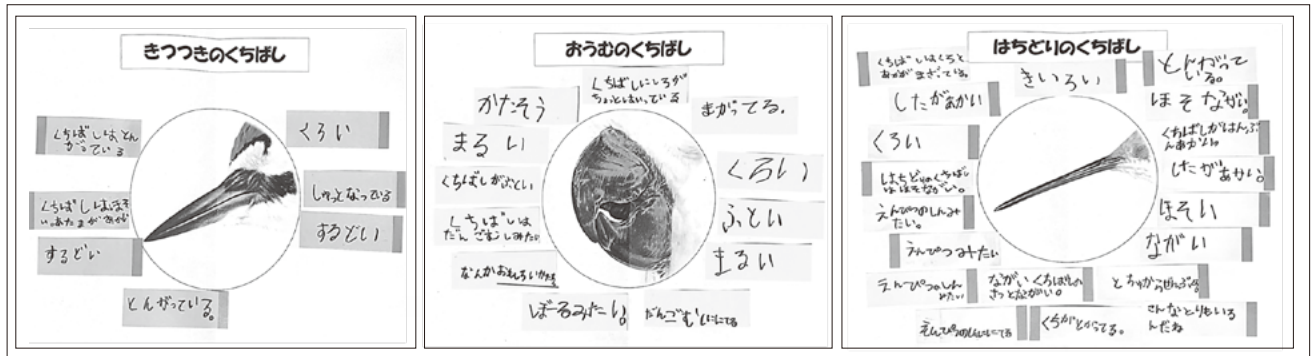


【図3 ワークシートの表 きつつき用】



【図4 ワークシートの裏 きつつき用】

探し出すという段階から、今までの知識の中から目の前の情報と当てはまるものを選び出しながら考える、という段階に進むことができたのではないかと考えられる。



[図5 グループで作成したワークシート]

② 教科書内容と同様形式のワークシートの活用した学習活動

この学習活動も3種類の鳥でくり返し行った。児童は、ワークシートの使用によって教科書の文章中から、「くちばしの特徴→問いかけ→答え→えさ」の順番に必要な情報を取り出すことができた。1回目のきつつきの時点では、ワークシートの書き方に迷っていた様子も見られたが、2回目のオウムの時点では、記入する際に、「『これはなんのくちばしでしょう』という文は、最後にはてながつくから、問いかけの文だ」や「問いかけの後には答えの文がくるよ」という発言が出てきていた。3回目のハチドリの時点では、教師と共に1つ1つ確認しながら進めなくても、ワークシートにまとめる活動を個人で進めることができた。これは、文章の中から教師の質問に対して対応する情報を探し出す力と共に、本単元の説明的文章の構造理解が深まったからだと考えられる。

③ 同様の内容単元の活用

あひる・ライオン・ダチョウの足についての教材は、第三次で行う動物クイズ作りの例となるよう、図6・7・8のようなクイズを電子黒板に提示した。「くちばし」の教科書内容と同様に、問いかけの文と共に、3種類の動物の写真を示し、答えの文と共に、「名前・使い方・できること・似ているもの」というそれぞれの文の役割を示した。以下は、それぞれの動物に対する答えの予想の場面と、答え合わせの場面の児童同士の会話と分析である。（※部分を筆者の分析とする。）

〈あひる〉【予想の場面】

- C1 : 見たことある。あひるだと思う。合っているかな。
- C2 : すごく黄色くて、つめが長すぎるよ。 ←(※写真から情報を取り出している。)
- C3 : 何かの鳥じゃない? くちばしのことも勉強したしさ。問いかけの文もあるよ。
- C4 : うちわってことは、パタパタ動かすってこと? ←(※文章に着目している。)
- C1 : ちょっと体が見えるけど、白だよ。やっぱりあひるじゃないかな。
- C3 : つめの間のやつは、なに? あひるのあしなら見たことあるけど、こんな感じだったかな? ←(※持っている知識と目の前の情報を重ね合わせている。)

【答え合わせの場面】

- C2 : 思ったとおりだ。せいはい、せいはい。
- C3 : このあしで泳いでいるってことね。 ←(※あひるの足の働きを理解した。)
- C4 : すごいね、ほく、泳いでいるところは見たことがないや、図鑑ならあるけど。
- C1 : (手を触って)あっ、ちょっと手のここにある。 ←(※身近なものと比べている。)

〈ライオン〉【予想の場面】

- C5 : くまだよ。くま。絶対そうだよ。
- C6 : ふわふわって猫みたい。猫にもあの黒いやつあるよね。 ←(※文章に着目し、写真から情報を取り出している。)
- C7 : ほくは猫だと思う。
- C5 : くまだと思うけどな。ふわふわしてそう。
- C8 : ぜんぜん分からない。でもさわってみたい感じ。



[図6 あひるの動物クイズ]

C6 : くまにも、あの黒いやつってあるの？

C7 : あるよ、あるある。動物園に行った時に見たもん。

↑(※持っている知識と目の前の情報を重ね合わせている。)

【答え合わせの場面】

C5 : えー、ライオンなの。ライオンとくまって足が似ているんだ。

C7 : へえ、黒いやつは肉球って言うのか。やっぱり猫にもあるよね。柔らかいからさ、音が出ないんだね。

C8 : うん、えものが気付かないうちに、そっと近づけるのはすごいね。

↑(※ライオンの足の働きを理解した。)

C6 : 確かに靴下だ。靴下があると、足の音がぜんぜん出ないもん。

↑(※身近なものと比較している。)

〈ダチョウ〉【予想の場面】

C9 : 何これ。木の枝みたい。 ←↓(※写真から情報を取り出している。)

C10 : 長細くって、つめがある。でも全然分からない。

C11 : こんな足を持っている動物がいるのか。

C9 : そうだね、へこんでいるところもあるよ。

C12 : 恐竜じゃない？

C11 : 黒くて、がっちりした指…、あれって指なの？ ←(※文章に着目している。)

【答え合わせの場面】

C12 : ダチョウか。知らなかった。体全部だったら見たことあったけどさ。

C9 : 指があるから、速く走れるのか。 ←(※ダチョウの足の働きを理解した。)

C11 : 外で走る時に靴を履いているから、似ているかも。

↑(※身近なものと比較している。)

C12 : 地面を蹴って走るのか。指の力が強いんだね。 ←(※文章に着目している。)

C9 : 写真のダチョウもすごく速そうだよ。 ←(※写真から情報を取り出している。)

このように、3つの動物について、児童と教師、児童と児童同士で対話をしな

がら多くの情報を取り出していくことができた。特に、「動物の足と使い方が似ているもの」という視点では、日常の中の身近なものと比較をしている場面が見られた。自分の手や足元を確認して、比べることで内容に対する理解が深まっている印象を受けた。指摘の段階では、既習の内容や日常生活に関する事と比較することも、理解を深めるために必要な視点であると考えられる。

(2) 変換 (テキストの解釈)

① 教科書内容に関連する道具の写真を活用した学習活動

児童は、3種類の鳥のくちばしと似ている使い方をする道具を、9種類の中から1つだけ選択し、その理由をワークシートに記入した。以下は、児童が選択した道具の集計結果と主な選択理由をまとめた結果である。

〈きつつきのくちばしと似ている使い方の道具とその理由〉

- ・ドリル (全14名)…ドリルはねじを入れて、穴を開けられるから (9名)。木に穴を開けて虫を食べるきつつきと、穴を開けるところが似ているから (5名)。
- ・やり (全9名)…刺して穴を開けられるから (8名)。とがっていて、刺したら木に穴が開くと思ったから (1名)。

〈オウムのくちばしと似ている使い方の道具とその理由〉

- ・ハンマー (全20名)…割ったり砕いたりするところがオウムと似ているから (12名)。ハンマーで砕くと、ものは割れるから (2名)。ハンマーは固いものを割ることができるから (6名)。
- ・クリップ (全3名)……えさをくちばしで挟むところが、クリップの使い方と似ているから (3名)。

〈ハチドリのかちばしと似ている使い方の道具〉

- ・ストロー (全23名)…ハチドリは花の蜜を吸って、ストローは飲み物を吸うから似ている (14名)。ストローは水を吸うものだから (6名)。



【図7 ライオンの動物クイズ】



【図8 ダチョウの動物クイズ】

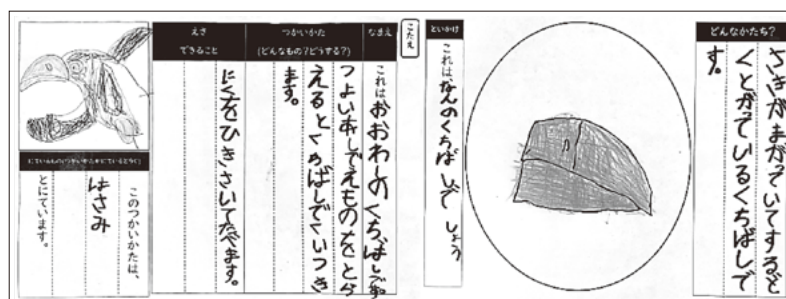
集計結果から、児童全員が選択した道具について、理由を明確に示すことができたということが分かる。鳥のくちばしの使い方を理解して、どこが似ているのかを根拠として理由に組み込むことができている児童が回数を重ねるごとに増加していることも分かる。児童は、日常生活で使用する道具の用途を想像して考えることで、鳥のくちばしとの共通点を見付けていた。この結果から、文章中の言葉を自分なりに解釈して表現する、という変換の力を十分に付けることができたと考えられる。

② 図鑑を活用した学習活動

図鑑を活用した調べ活動を行ったのは初めてであったが、児童は鮮明な写真と未知のものが多く書かれている図鑑に心惹かれている様子であった。多くの児童は、鳥のくちばしや動物の足の特徴的な使い方やはたらきが詳細に書かれているもの、クイズの答えにふさわしい場面が写真として掲載されているものを選択していた。クイズの問題となる部分の絵を写真の中から選び取って描いたり、鳥や動物の特徴を誇張して答えになる部分の絵を描いたりした。この姿から、写真や文章から情報を取り出して、絵として表現するという変換を経ることで、自然とクイズの内容を熟考すると共に、作成しているクイズが問題として成り立っているのか、より良い問題なのかと評価することもできたと考えられる。

(3) 理由付け(熟考と評価)

単元のまとめとして全員が、図鑑と指摘で学習してきた構造を活用して動物クイズを作成した。図9は児童が作ったオオワシのクイズである。オオワシの「えものに食い付いて、肉を引き裂く」というくちばしの使い方から、はさみの使い方を連想し、クイズの答えに表現されていると考えられる。このように図鑑から情報を取り出し、絵や別のテキストに変換するという過程を経て、理由付けの段階に進むという学習活動であったが、指摘の段階において、説明的文章の構造を押さえていたため、苦手意識を持つことなく楽しんでクイズを作成する児童が多く、困難は少なかった。指摘の段階で時間をかけて理解を深めていくと、その力が変換や理由付けの段階で生かされるということが分かった。



【図9 児童が作成したオオワシの動物クイズ】

理由付けの段階に進むという学習活動であったが、指摘の段階において、説明的文章の構造を押さえていたため、苦手意識を持つことなく楽しんでクイズを作成する児童が多く、困難は少なかった。指摘の段階で時間をかけて理解を深めていくと、その力が変換や理由付けの段階で生かされるということが分かった。

5 研究の成果と今後の課題

本研究においては、3つの観点を用いた手立てが、読解力の形成に有効であったと言える。入門期において、指摘と変換を組み込んだ手立てを繰り返すことで、指摘と変換の力が読解力の基盤として着実に身に付き、理由付けの段階に円滑に進むことができる。そして、結果として読解力を構成する3つの要素が形作られるということが考えられる。しかしながら、1年生前期の実践データの性質上、児童の生活経験や語彙力の個人差が本研究の課題となっている。指摘や変換の段階で、言いたいことが表現できなかつたり、道具に関する知識がなかつたりした。児童自身が読解力を身に付けていくため、今後も、様々な言語活動を通じた語彙力の向上と共に、同様の説明的文章での実践を繰り返しながら、検証を積み重ねていく必要がある。

6 引用・参考文献

- 1) 国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査2018年調査（PISA2018）のポイント」, 2019, <https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/> (URLの最終閲覧日2023年10月1日)
- 2) 田中博之「特集：読解力を考える 読解力とはどのような力か」(情報の科学と技術68巻8号), 2018, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/68/8/68_390/_pdf (URLの最終閲覧日10月1日)
- 3) 同上
- 4) 松野孝雄『「読解力」授業づくりへの挑戦小学1-2年生』, 明治図書出版, 2008, p.14
 - ・入澤亜由美「入門期における、読みを深めるための効果的な指導法について」, 『教育実践研究』第20集(上越教育大学学校教育実践研究センター), 2010
 - ・五十嵐基子「論理的思考力の基礎を育む授業づくり」, 『教育実践研究』第26集(上越教育大学学校教育実践研究センター), 2016